

## 「j.ピンイン」という名前の

# 中国語音節の仮名表記案

陳 淑梅

中国語音の仮名表記に関する「研究」を始めたのはかれこれ一二年ほど前のことでした。自ら興味を持ったというよりも、ある友人からの依頼がきっかけで、それからのめり込んだわけです。

### ■先行研究に関して

まず、ことわっておきたいのは、私が中国語音の仮名表記を研究した目的は中国語の発音教育のためではありません。当時（現在でも）中国の人名・地名の現地音の仮名による表記および読み方に関して、明確な規定が存在せず、多くの場合は報道機関・出版社等では、各々独自に策定したルールで表記しています。統一性がないため、いろいろな不便と混乱が

生じやすくなっているだけではなく、中国語での実際の発音とかけ離れた場合もあるため、国際的な交流においても支障を生じかねません。先に言った「友人の依頼」というのは、まさにこれに悩まされているA新聞社Y氏の方ことです。Yさんによると、中国の人名地名をとりあげるたびに読み方の表記の仕方に困ります。そこで、日本の新聞やテレビなどのマスコミで使う統一したカタカナ表記法を作ってもらえないかという依頼を受けました。

このように、研究を始めたわけですが、研究のステップとして、次のような計画を立てました。

- (1) 研究グループを立ち上げる
- (2) 中国語音節表のカタカナ表記の先行研究を調べる
- (3) カタカナ表記案の考案
- (4) カタカナ表記案の聴取実験
- (5) 実験結果に基づいて、表記案を再検討、決定

私が所属している大学は理系の先生がたくさんいらっしゃるという「得天独厚」の好条件に恵まれ、研究グループは、中国語専門の私のほか、音響学、データベース、コンピュータ専門の先生四名で発足しました。この文理融合のグループの研究テーマ、研究内容とも認められ、大学の共同研究から研究費、また科研費もいただき、かなり「リッチな」研究になったわけです。

研究に先立って、先行研究をいろいろ調査しました。主に調査したのは、台湾総督府が一九三〇年に発行した『台日大辞典』（国書刊行会印版『台湾語大辞典』）、共同通信社が編集、二〇〇一年に発行した『中国動向二〇〇

## 中国語

## 成語でコミュニケーション

付・ドリル

邱奎福 著 的確な成語を使って、簡潔で説得力のある中国語表現力を養う。場面別成語でコミュニケーション/多音字を含む成語/四字成語マスタードリル。

A5判 ■定価1575円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

## かの地

那里

王海平 著  
北都はる 著  
北川 遥 訳

中国人の精神世界の変化に触れることは、経済指標よりも如実に今後の中国の子測材料になるかもしれない。文学のみならず、映画、テレビの脚本も手がける人気作家が、現代中国人の心の問題を哲学的・幻想的に描く。物質的な充足の後には訪れる空しさを問う掛ける「かの地」。代理出産の顛末を描いた「母語」。価値観がゆらぐ現代への一つの回答ともいえる「莎草塀」など、短編三本と脚本二本を収録。

四六判 ■定価1470円

○』、对外経済貿易大学、商務印書館、小学館が一九九四年に発行した『日中辞典』、帝国書院地図編纂室が一九八七年に発行した『中国国勢地図』などです。調査の結果、以下のような問題点が判明しました。

- (1) 「j」と「i」の区別は不明確、あるいは区別していない。
- (2) 「u」と「ng」は区別されていない、あるいは区別の工夫はされていても、もとの中国語音とかけ離れている。
- (3) 「si」、「su」、「se」等の類似音の区別は不明確、あるいは不統一である。
- (4) 「zh」、「z」、「q」、「j」、「b」、「x」が混同している。

## ■jピンインの提案

以上のように、区別しない音節が多く存在することは明確性に欠けると考えました。

例えば、「陳 chen」と「程 cheng」、「林 lin」と「凌 ling」のような場合、「u」と「ng」の区別をしないと、混乱を避けられませんが、

以上の問題点を踏まえ、われわれが提案する中国語音節の仮名表記は以下の原則に従いました。

- (1) 中国語の全ての音節を明確に区別すること。
- (2) できる限り中国語音に近いこと。
- (3) 中国人が聴いた場合に判別が可能であること。

ることと同時に、日本人が発音しやす

しかし、中国語音節は日本語のそれに比べて圧倒的に多くあるため、上記の原則を満足するための解決策として、

- (1) 中国語の一音節を表現するために一字あるいは複数の仮名を利用する。ただし、一音節に対して仮名五文字以内に制限することとする。
- (2) 「ア」と「ア」など文字の大小を活用する。ただし、小さい文字としては、母音のほか「ツ」「ヤ」「ユ」「ヨ」といった既存の文字のみを用いる。
- (3) 長音と短音の別を有効に活用する。

この基本方針のもとで中国語音節の仮名表記を作成しました。この表記案を我々は「jピンイン」と名付けました。「jピンイン」表記の特徴的な点を幾つか挙げますと、

(a)  $\text{ㄐ}、\text{ㄑ}、\text{ㄒ}$  について

いずれも日本語の母音には相当するものがない。 $\text{ㄐ}$ は、日本語の「オ」と「ウ」[ア]の中間的な発音のため(実験結果に基づいて)「オーア」とした。また、 $\text{ㄑ}$ については、試行錯誤の結果「エイ」とした。

(b) 有気音／無気音について

日本語における無声／有声に対応付けて以下のようにした。

$\text{ㄆ}$  → パ行 /  $\text{ㄆ}$  → パ行  
 $\text{ㄊ}$  → タ行 /  $\text{ㄊ}$  → タ行  
 $\text{ㄎ}$  → カ行 /  $\text{ㄎ}$  → ガ行  
 $\text{ㄅ}$  → チイ /  $\text{ㄅ}$  → ジイ  
 $\text{ㄑ}$  → チ /  $\text{ㄑ}$  → ジ  
 $\text{ㄒ}$  → ツ /  $\text{ㄒ}$  → ズ

(c) 巻舌音／舌面音

子音に相当する部分の j ピンインとし

て以下の仮名をあてた。

$\text{ㄓ}$  → ジ /  $\text{ㄓ}$  → ジイ  
 $\text{ㄔ}$  → チ /  $\text{ㄔ}$  → チイ  
 $\text{ㄑ}$  → シ /  $\text{ㄑ}$  → シイ  
 $\text{ㄒ}$  と  $\text{ㄒ}$  について

日本語には巻舌音  $\text{ㄑ}$  に相当する音節が無いので、「ウ」+ラ行でこれを表わすこととした。

$\text{ㄒ}$  → ウラオ /  $\text{ㄒ}$  → ラオ  
 $\text{ㄒ}$  → ロン /  $\text{ㄒ}$  → ローン

(e)  $\text{ㄐ}$  と  $\text{ㄑ}$  について

$\text{ㄐ}$  については「ハ」「ホ」を始め、 $\text{ㄑ}$  については「フ」で始めた。

(f)  $\text{ㄐ}$  と  $\text{ㄑ}$  について

$\text{ㄐ}$  は「ン」を、 $\text{ㄑ}$  には「ーン」とした。

$\text{ㄢ}$  → アン /  $\text{ㄢ}$  → アン  
 $\text{ㄤ}$  → イン /  $\text{ㄤ}$  → イン

作成した j ピンイン (第一版) を附表として報告末尾に示しました。

### ■ 聴取実験

作成した j ピンインの妥当性を検証するため、聴取実験を行いました。聴取

実験に使った音声資料は、中国語の発音に関する知識を全く有しない日本語を母語とする成人男女二名がそれぞれ片仮名表記された j ピンインを読み上げたもの。被験者は、日本語に関する知識を全く有しない中国・北京市在住の中国人男女各一〇名(計二〇名)で、いずれも標準中国語を日常的に使用している大学生。実験は静かな L1 教室で一斉に実施し、刺激音声は密閉型ヘッドホンを通して聴かせ、回答用紙に筆記により記入させました。

実験結果を簡単にまとめると、

(1) 単母音

$\text{ㄐ}$  と  $\text{ㄑ}$  は比較的高い正答率が得られている。その次は  $\text{ㄒ}$  と  $\text{ㄒ}$ 。予想通り  $\text{ㄐ}$  と  $\text{ㄑ}$  の正答率は低かった。

(2) 無気音／有気音

$\text{ㄅ}$ 、 $\text{ㄑ}$ 、 $\text{ㄒ}$ 、 $\text{ㄑ}$ 、 $\text{ㄒ}$ 、 $\text{ㄑ}$ 、 $\text{ㄒ}$  に対して、比較的高い正答率が得られた。このことから、中国語の無気音について、日本語の濁音で表現する方針の妥当性を支持する結果が得られた。残念ながら、

日本語の清音で表現した  $\text{t}^h$ 、 $\text{f}$ 、 $\text{p}^h$  などの有気音に関しては、低い正答率しか得られず、無気音との混同が目立った。これは日本語の破裂音では中国語の有気音ほど強く息を出さないためと考えられる。特に破擦音の  $\text{b}$ 、 $\text{ch}$ 、 $\text{c}$  については一層の工夫が必要であるとの結果を得た。

(3)  $\text{j}$  と  $\text{z}$

日本語にはそり舌音がなく、英語などの外来語表記にも  $\text{j}$  と  $\text{z}$  は区別することなくラ行音で行なっている。われわれはこれをあえて区別して表記することとし、前述のように  $\text{z}$  については「ウ」+ラ行音で表現した。結果  $\text{z}$  に関して五八パーセントの正答率が得られ、 $\text{j}$  と  $\text{z}$  を区別するための有望な手法としての感触を得た。

(4) その他

$\text{n}$ 、 $\text{t}$ 、 $\text{ng}$  の対立の混同、 $\text{zi}$ 、 $\text{zu}$ 、 $\text{ze}$  の識別など課題が残った。

いろいろな問題が残りますが、中国語音節を日本語で仮名表記するため、中国

語音節表に対して網羅的かつ統一的な対応表  $\text{j}$  ピンインを作成した次第です。それを文頭に挙げた依頼者の A 新聞の Y 氏に「成果」としてお見せしたところ、「とてもよくできています」と思いますが、残念ながらマスコミの基準では三音節までしかルビはつけることができないですね。新聞の場合、漢字と漢字の間スペースを空けるわけにはいかないからね」という何とも惨い返事でした。

しかし、現在は初志ではない中国語の発音教育に活躍させています。私が担当しているラジオ番組やテレビ番組のテキストの音節表や「とっさの中国語」というミニ番組の本文などに発音記号としてピンインと併記して使われています。

中国語の発音教育はこれに頼ることはもちろん賛成できませんが、日本の学生の漢語ピンインを記憶する時の負担を減らすために少しでも役に立つのではないかと思いますし、特に実用中国語を学ぶ成人者が増えているいま、 $\text{j}$  ピンインは効果的な学習ツールの一つとして期待できるとは思いません。

まだまだ要改善なところがたくさんありますが、この原稿を書いたことをきっかけに、 $\text{j}$  ピンインについての再研究でもしてみようかと思うようになりました。

■感想

今回福嶋さんと池田先生が制作された「中国語音節表記ガイドライン」を拝見したいへん感銘を受けました。特に  $\text{z}$  と  $\text{z}$  に関する工夫はたくさん学ぶものがありました。また、メディア用の「ガイドライン」はまさに我々が作らなければならなかったものであり（実は同じく、最長三音節までのメディア用の  $\text{j}$  ピンイン音節表も作っていますが、ついつい世に出さずそのままにしてしまいました）、嬉しく思いました。

(ちんしゅくばい 東京工科大学)

シリーズ「現代中国語のカタカナ発音表記をめぐる」では、「中国語音節表記ガイドライン」【平凡社版】(二〇一一年八月) <http://www.heibonsha.co.jp/cn/> をふまえて、今後の課題や関連する問題についてご寄稿いただいております。なお、「 $\text{j}$  ピンイン」音節表(東京工科大学  $\text{j}$  ピンイン研究プロジェクト作成)は、小社ホームページ (<http://www.tohoku-shoten.co.jp/export/sites/default/toho/toho368-chen.xls>) にて公開中です。